

第3章 議論の段階

1. 2つの議論と1つのカルタ

ワークショップによる熟議の場合、成果を発揮する場面は、課題を見出し解決のための議論を広げ、そして議論の中で収束する中で、合意を得る過程にある。「熟議 2015 in 兵庫大学」では課題を見つける、そして課題の解決を探る、という2段階で議論を行う企画であることは、第1章での記載の通りである。議論の結果を報告するにあたり、議論の流れを踏まえて、2段階でのまとめとなっていることをまずは示す。つまり、議論の結果は2つある。

ところで、議論の舞台となるテーブルであるが、参加者の人数を踏まえAからLまで用意、それぞれのテーブルに集う参加者をグループとして、以下扱うこととする。各グループは、大学生のファシリテーターが1名、高校生と大学生、及び社会人の参加者の6～8名により構成される。それぞれのグループにより若干の相違があるが、高校生と大学生が4～5名、社会人が2～3名という内訳で、いずれも若年者の方が多い構成である。そしてグループのメンバーについては、終日変更をせず、休憩時の昼食も共にしつつ、グループ内で親睦と信頼を強め、議論と共有を深める。

前半の議論として、課題を見出す議論、——ここでは「テーマを出すための議論」——を行った。先立っての熟慮段階を踏まえ、それぞれが懸念や気づきを出しあい、収束させる中で、安心・安全について、後半の段階で議論するテーマを出すことができる。この時、メインファシリテーターは、各グループに対して、3つ以内でテーマを出すこと、またテーマを疑問形で作成することを課している。第2節の「熟慮から議論の段階へ—熟議の前提をふまえて—」では、グループ毎に議論の内容と出された3つのテーマを記述し、それらの傾向と背景を分析して、6つのカテゴリに分かれることを示す。

後半の議論は、出されたテーマについての解決の方向を話し合うが、企画段階で記したように、その際に自分のグループから出されたテーマと、他のグループのテーマの2つを選択して議論をする。グループ毎に、前半の議論で出された3つ以内のテーマと、後半の議論でどの2つのテーマを取り上げたかを図示しているので参考にして欲しい。後半の議論については、第3節「安心・安全の課題の解決と提案」にまとめられている。AからL全てのグループでの、2つのテーマそれぞれでの議論の内容と結果、提案を記すとともに、議論された24のテーマを5つのカテゴリに分類している。そしてこの節は、「熟議 2015 in 兵庫大学」での重要な結論部分となっていることは言うまでもない。

さて、後半の議論で得られた結論や提案を身近なものとするための工夫が、最後のカルタの作成である。それぞれのグループに3～4の最初の1文字を手渡して、それに続く言葉を紡いでカルタを作成した。若年者の言葉は、社会人とは異なる。しかし、結論を言い表すカルタを作成することで、多くの人にそれを共有してもらおう機会を持ちたいとの思いは共通していた。できあがったカルタは、本章の最後

のページに、五十音順で示されている。グループでの結論を踏まえ、それを言い表すカルタを作成することは、実は結論をグループ内で共有することにもつながる。ただ、どのグループがどのカルタを作成したか、は報告書では触れない。カルタは全ての参加者の共通のものであり、その真意はカルタのできを競うのではなく、カルタによって参加者を一つにまとめることである。

2. 熟慮から議論の段階へ -熟慮の前提をふまえて-

これまで記述してきた通り、兵庫大学における「熟慮」のメソッドには熟慮の段階を伴う。多様な属性の多世代の参加者がテーマに対して熟慮を行い、熟慮の結果を持ち寄ることによってはじめて議論が成り立つという前提に立つからである。今年度の熟慮では、「今住んでいる地域に暮らす中で安全でない、安心が感じられない点」について参加者に事前に考えていただき議論に臨んでいただいていた。

(1) 具体的にどのような議論がなされたか

今回の熟慮では A グループから L グループまで 12 のテーブルが設けられており、世代を超えた参加者がテーブルを囲んだ。とりわけ、高校生の多さが今年度の熟慮の特徴であったと言えるであろうか。前半の議論の目的は、後半で議論するためのテーマを抽出することであった。ここで、それぞれのグループが具体的にどのような議論を行い、その結果としてどのような課題が抽出されたのかを概観するとともに、抽出された課題を概観しつつその傾向について考察していきたい。

傾向	出されたテーマ
Aグループ ・イヤホンをして自転車を運転している、決められた場所に自転車を止めない、速度制限を守らない車がある、といった「交通マナー」に関することをはじめ、街灯が少ないため夜道が暗い、自転車を盗られたといった「防犯」に関する事などが意見として多く出されていた。	① 交通ルールマナーを浸透させるには？ ② 防犯力を上げるには？ ③ 道路環境をよくするには？
Bグループ ・東加古川駅から兵庫大学までの道路でバイパスと交差するトンネルが危ない、という意見に代表される道の狭さなど交通の問題をはじめ、盗難、不審者などの軽犯罪への対応をめぐり、ため池の増水という自然災害等にも議論が及んでいた。	① なぜ事故（交通）が多いか？ ② なぜ軽犯罪が多いのか？ ③ なぜ自然災害対策が進まないか？

<p>Cグループ</p> <p>・防犯面に関する意見が多く、不審者への対応などに対して地域住民の協力や行政、とりわけ警察などのパトロールの強化といった具体的な解決策が議論された。また、自然災害に関する意見も多く出され、有効な備えができていないことに対する危惧、住民の意識の低さなどが指摘されていた。</p>	<p>① 犯罪被害を減らすためには？</p> <p>② 例えば、地域力とは何か</p> <p>③ マナーを強化するには</p>
<p>Dグループ</p> <p>・他グループと同じように自転車を中心にした交通問題（道が狭い、ガードレールが少ない）への言及をはじめ、災害時、とりわけ大雨による冠水、土砂崩れといった災害による高齢者、障がい者の孤立をどう解決するかというような議論が行われていた。</p>	<p>① 治安をよくするためには？</p> <p>② 交通事故を起こさないためには？</p> <p>③ 災害が起こった時どうするべきか？</p>
<p>Eグループ</p> <p>・車が多いのに道路が狭い、歩道と車道、自転車道の区別といった道路をいかに安全に保つかという議論とともに、子どもが安心して遊ぶことのできる場をどう作るかといった子どもの安心・安全の議論がなされていた。そしてそれらへの対応として、個人として何ができるか、地域として何ができるかを考えていかなければならないことが共有されていた。</p>	<p>① 災害時の被害を少なくするには？</p> <p>② 子どもが安全安心に生活するには？</p> <p>③ 交通安全対策をどうすれば良いか？</p>
<p>Fグループ</p> <p>・空き巣、痴漢といった軽犯罪に対する備えと対策と、橋の歩道が狭い、自転車の二人乗りなどの交通問題が議論された。また、ゴミの問題、ため池に繁殖する外来種の問題といったところにも議論が及んでいた。</p>	<p>① ご近所付き合いはしていますか</p> <p>② 交通整備、交通マナーはどうなっているのか？</p> <p>③ 生活環境は大丈夫ですか</p>
<p>Gグループ</p> <p>・安心安全について①誰が何をするのか②必要なインフラは？③身近な対策はというキーワードで集められた意見を類型化しながら議論をしていた。それぞれにまとめられた意見の中で代表的なものをあげると①には防災防犯の活動に参加する、行政、住民、企業、各種団体で安全安心の実現に向けて役割分担が必要。②では、交通問題を解消するための道幅の拡張、加古川の決壊対策など。そして③では楽しみながら防災の勉強をする、子どもなどが犯罪にあった時の逃げ場所づくりなどの意見が出されていた。</p>	<p>① 自分の地域を知っていますか</p> <p>② 地域で安心して暮らせますか</p> <p>③ 自分の町のインフラは大丈夫ですか</p>

<p>Hグループ</p> <p>・加古川という地域の活性化、自転車、街灯問題といった交通に関する問題、そしてそれらを解決していく方法としての世代間交流の可能性について忌憚のない意見が交わされていた。</p>	<p>① 地域のコミュニケーションを深めるには？</p> <p>② 災害にどう備えるか？</p> <p>③ 住みやすい街にするには？</p>
<p>Iグループ</p> <p>・防犯、防災、事故などに対する「意識」の問題を教育・学習などによってどう変容させていくかということと、交通・災害の問題を解決していく際の財源の問題という性格の異なる課題について幅広く議論されていた。とりわけ、安全に対する意識の根本は、自分の体に愛情を持つことから始まるという意見は非常に印象的であった。</p>	<p>① どこからお金が出る？</p> <p>② 安全に関する情報を共有するには？</p> <p>③ 自己愛を向上させるには？</p>
<p>Jグループ</p> <p>・防犯・交通問題改善の観点から暗い道路への街灯の設置、地域住民によるみまわりの促進などが議論されていた。また、災害対策とともに「水環境」に対する意見（水辺に親しむ、河川改修等を含んだ水をめぐる安全）が多く交わされていたのが印象的であった。</p>	<p>① 災害時に備えて一人一人が優先的に何をすべきか？</p>
<p>Kグループ</p> <p>・踏切の遮断時間の長さや、人気（ひとけ）のなさ、ながら運転や死角の多さといった交通に関わる問題や、自然災害への対応、不審者による犯罪への対策の重要性などが議論されていた。</p>	<p>① 不審者から身を守るには</p> <p>② 安全な道を作るには</p>
<p>Lグループ</p> <p>・参加者の熟慮の結果（交通問題や軽犯罪などの安心安全を脅かす問題群）に対してソフト面（自分たちで変えていけるような内容）とハード面（自分たちではどうすることもできない行政が対応するような内容）に分けて議論がなされた。とりわけ特徴的な議論は、高校生の参加者から出された「食」に対する安全の議論であった。</p>	<p>① 安全に道路を利用するには？</p> <p>② あなたの食べるものは安全ですか？</p> <p>③ 加古川って安全なの？</p>

表 3-2-1

(2) 課題の抽出からみえてくる傾向と、参加者の考える加古川地域の課題

A から L のグループで議論がなされた結果、上記のようなテーマが抽出された【表 3-2-1】。抽出されたテーマはあわせて 33 件で、類似するテーマをグループ化し、大別すると以下のように分けることができる。※ () 内はグループ

交通・道路環境に関すること <9 件>
交通ルールマナーを浸透させるには？ (A)、道路環境をよくするには？ (A)、なぜ事故 (交通) が多いか？ (B)、マナーを強化するには (C)、交通事故を起こさないためには？ (D)、交通安全対策をどうすれば良いか (E)、交通整備、交通マナーはどうなっているのか？ (F)、安全な道を作るには (K)、安全に道路を利用するには？ (L)

防犯に関すること <5 件>
防犯力を上げるには？ (A)、なぜ軽犯罪は多いのか？ (B)、犯罪被害を減らすためには？ (C)、治安を良くするためには？ (D)、不審者から身を守るには (K)

自然環境・自然災害に関すること <6 件>
なぜ自然災害対策が進まないか？ (B)、災害が起こった時にはどうするべきか？ (D)、災害時の被害を少なくするには？ (E)、災害にどう備えるか？ (H)、災害時に備えて一人一人が優先的に何をすべきか？ (J)、加古川って安全なの？ (L)

自分の住む地域に関すること <5 件>
生活環境は大丈夫ですか (F)、自分の地域を知っていますか (G)、地域で安心して暮らせますか (G)、自分の町のインフラは大丈夫ですか (G)、住みやすい街にするには？ (H)

地域の「つながり」に関すること <4 件>
例えば地域力とは何か (C)、ご近所付き合いしていますか (F)、地域のコミュニケーションを深めるには？ (H)、安全に関する情報を共有するには？ (I)

その他 <4 件>
子どもが安全安心に生活するには？ (E)、どこからお金が出る？ (I)、自己愛を向上させるには？ (I)、あなたの食べるものは安全ですか？ (L)

(3) 参加者の考える加古川地域の課題

熟議の前半部分において抽出されたテーマを概観し、整理すると6つのカテゴリに分けることができる。各グループのディスカッションとテーマを検討してまず率直に言えることは、加古川地域の安全・安心を議論するにあたり交通・道路環境に関する課題が非常に重要なテーマであるということである。高校生、大学生を中心とした参加者にとって加古川地域の安全・安心を脅かす事柄として「道の狭さ」、「交通量の多さ」、「歩行者や自転車と車の通行区域が分離されていないこと」、「狭路を乗用車が走る速度」など多岐にわたる交通に対する不安が挙げられる。とりわけ自転車をめぐる「交通・道路事情」は高校生、大学生の大きな関心事になっているといえよう。車を運転する世代にとってもすれ違う車のスピードなどには恐怖を覚える人も少なくないようである。熟議の後半でどれだけのグループが交通・道路環境を議論のテーマに設定するかにかかわらず、加古川地域において継続的に検討されなければならない課題であることはいうまでもないであろう。

防犯に関することでいえば、不審者への対応、窃盗に対する不安が多くのグループで語られていた。自分たちのみならず犯罪の被害者になる人のことを考えれば喫緊の課題であるがゆえにそうした不安への対策として防犯カメラの設置などの方策まで議論しているグループが多く見受けられた。また、自然環境・自然災害に関する議論も幾つかのグループで熱心に行われていた。自然環境としての加古川をはじめ、ため池などの水環境が加古川地域の特徴である反面、決壊したらどうなるかといった水に対する備えについては非常に関心が高いように思われた。

自分の住む地域に関することについてよく知らないという事実、そしてその地域に住む人々との「つながり」が必ずしも緊密ではないことも参加者の不安に感じる事として挙げられている。災害や防災、子育てを前提として地域のことをどれだけ知っているか、どのような人と「つながり」を持っているか、またそのつながりを具体的にどのようにつくっていくかということに関心が集まり議論されていた。その他の課題でも、食をめぐる課題、こどもをめぐる課題なども数は少ないが看過できないテーマである。

以上のようなテーマが参加者が考える加古川地域の課題として挙げられた。このテーマの中から参加者による12のグループが改めてどのようなテーマを選び出し、どのような解決策を導き出したのか、熟議後半の結果に注目していきたい。

(小林洋二)

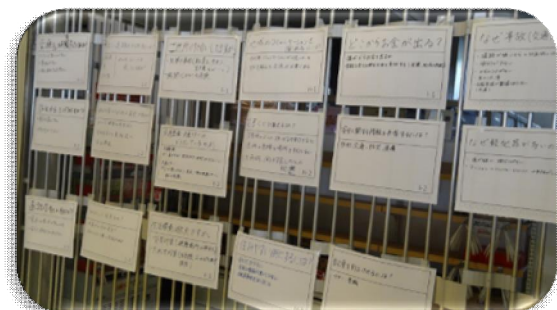
前半議論から後半議論へ・・・



自身を感じる地域の課題を出し合います。



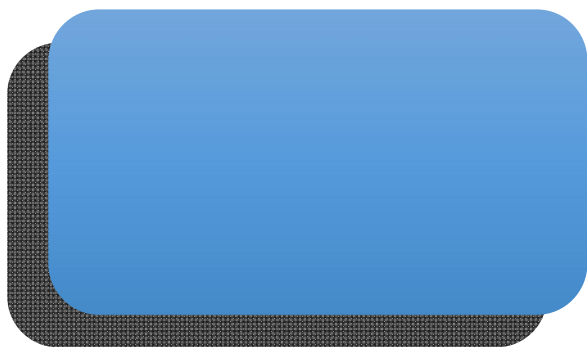
出された意見を基に、グループ内で3つのテーマを抽出します。



A~Lの12グループから33のテーマが出されました。



33のテーマを参加者全員で共有します。

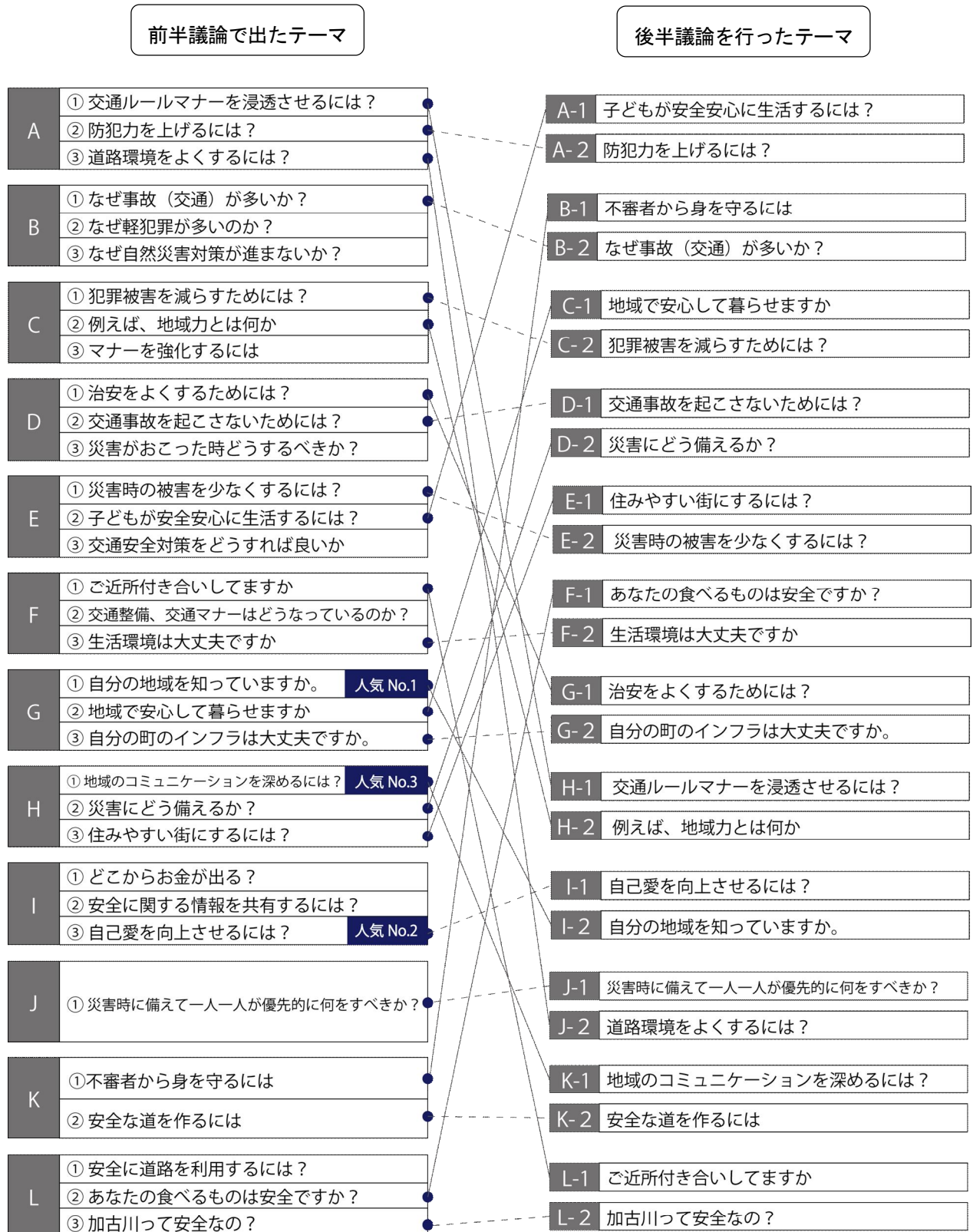


議論したいテーマを2つ選択します。



後半の議論が始まります！

前半議論で出たテーマと後半議論を行ったテーマ



※破線は自グループのテーマ、実線は他グループのテーマを示す

3. 安心・安全の課題の解決と提案

前述のように第3節では、後半での議論の内容と結論、提案について記載するとともに、その分析を行う。議論の内容等については、各テーブルで記録係が作成した記録簿及び、グループ毎に示す写真から、それぞれのテーマについての議論の流れを再構成、また結論や提案については、熟議プロジェクトのメンバーがそれぞれのテーブルで採取した結論等を参考にしている。結論を採取した目的は、企画に示したように、速報を作成し、議論の結果を参加者に早くお知らせするためである。速報の内容については、巻末の「資料編」を参考にしたい。

続いての分析では、話し合われたテーマを5つのカテゴリに分類することから始め、それぞれのカテゴリについてどのような結論が得られ、あるいは提案がなされたのか、を分析している。特にその背景にある、当該地域と市民に係る課題については、議論全体の意義との項を設け、その中で語る。

なお、前述の通り、第2節では6つのカテゴリに分類しており、本節とは異なる部分があるが、それは本節では、結論や提案を踏まえてテーマを再度見直し、カテゴリ化しているためである。同時にこのことは、後半の議論であるテーマを採択したグループが、前半の議論でそのテーマを出したグループの想定した解決策とは異なった捉え方をした可能性を示しており、議論を広げることを企図した、2段階の議論を行い、後半の議論の際には別のグループのテーマを選択することができる、という当該企画の正当性を示した、とはいえないであろうか。

(1) グループ毎の具体的な議論



【解説】

テーマ：子供が安全安心に生活するには？

子供を小学生と定義し、出された意見をその内容から、「公園」「地域コミュニティ」「その他」に分類した。最も多くの意見が出された「地域コミュニティ」に注目し、解決策がまとめられた。登下校時に大人がつきそう、近所の方が声かけを行う、挨拶をしあう、不審な写メールなどの情報を共有することが提案された。

テーマ：防犯力を上げるには？

「自転車を盗難された」「後ろについてこられた」など体験談が示され、それらに対する解決策が議論された。その結果、まずは自分の身は自分で守る意識が大切であること、その上で、地域の助け合いも必要であると結論づけられた。地域の助け合いの具体的なものとして、店の明かりをつける、地元の人でパトロールを行う、子供への防犯指導の機会を設けるなどがあった。

Bグループ



【解説】

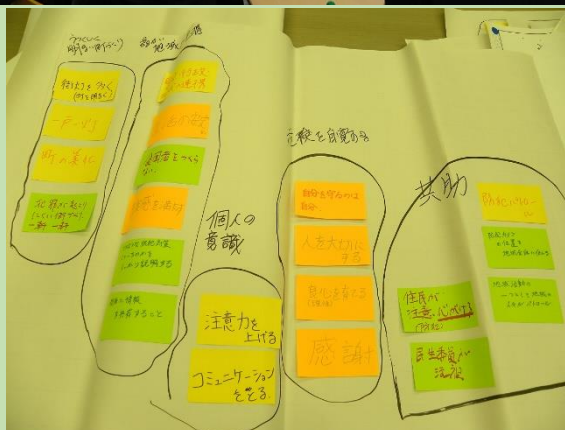
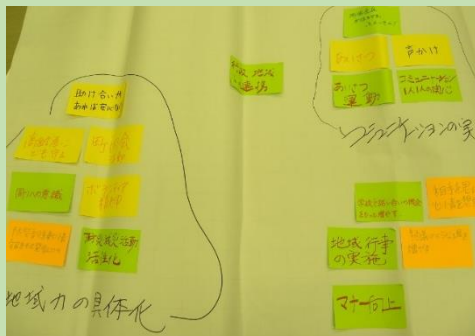
テーマ：不審者から身を守るには

毎日のあいさつ、近所どうしのコミュニケーションで情報を共有、子供や女性対象の防犯セミナーを行う、パトロール強化、防犯カメラの設置、一人で帰らない、暗い道は遠回りするなど、多くの意見が出された。それらが「挨拶など身近な活動」「道徳や防犯の教育」「環境整備などの対策」として集約された。

テーマ：なぜ事故(交通)が多いか？

道路が狭い、計画性のない道路設置、車の渋滞が多い、自転車道や歩道が整備されていない、街灯が少ない、溝に蓋がないなど環境に係る意見、交通マナーを守らないことについての意識に係る意見、事故が多い場所などが共有できていないなどの情報に係る意見が出された。また、自動車や自転車の取締り強化を求める声もあった。

Cグループ



【解説】

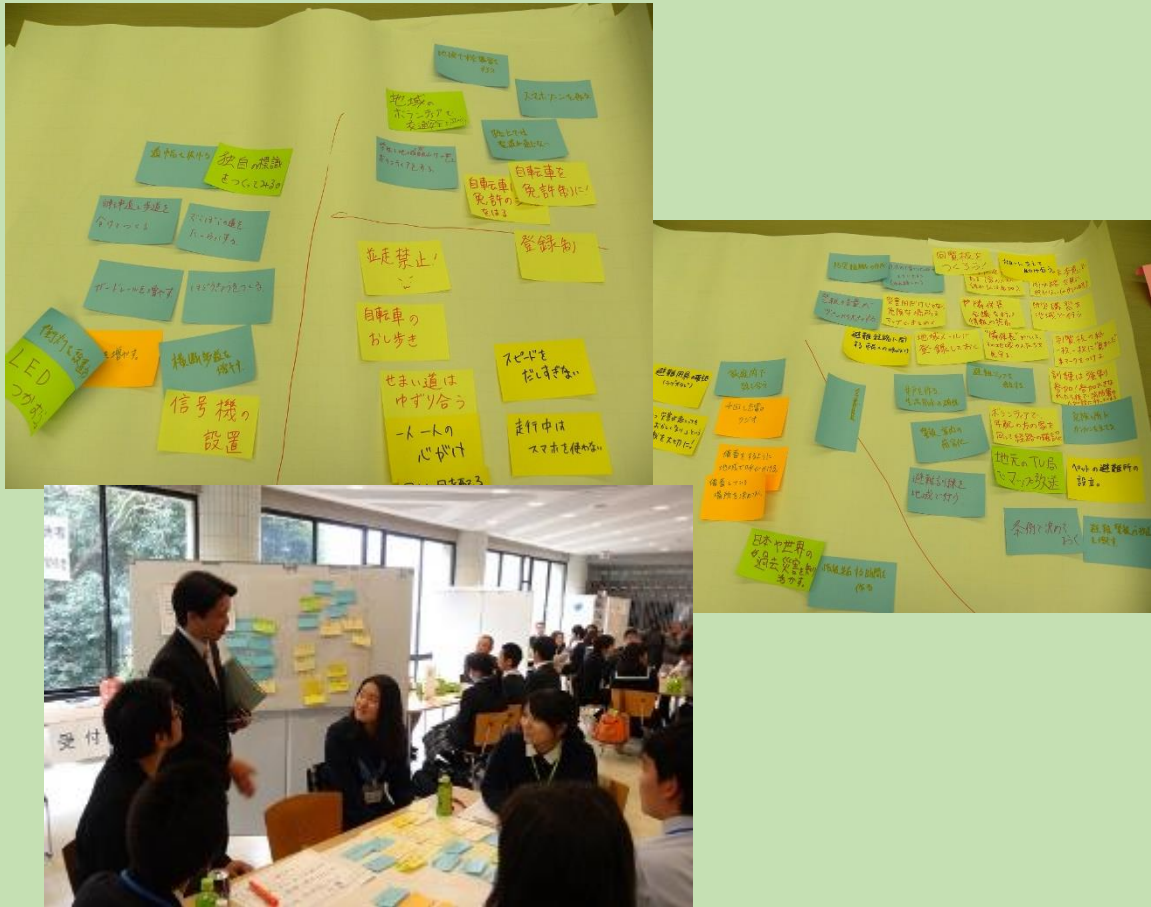
テーマ：地域で安心して暮らせますか

出された意見は大きく2つの事柄に分類された。1つは地域力の具体化であり、危険時には地域の高齢者や子供のことを優先で考える、地域で話し合えるような場をつくる、ボランティア精神を尊重するなどであった。もう1つはコミュニケーションの実践であり、行政との連携、地域行事の実施など、組織などの垣根を超えた情報の共有であった。

テーマ：犯罪被害を減らすためには？

出された意見は、大きく3つの事柄に分類された。1つ目は明るく、美しい街づくりであり、そのような環境では犯罪が起こりづらいと考えられた。2つ目は共助を念頭に置いた個人意識の向上であり、良心を育んだり、感謝の気持ちをもてるような啓蒙が大切とされた。3つ目は地域の温かい連携であり、行政からお隣さんまでの協調体制が求められた。

Dグループ



【解説】

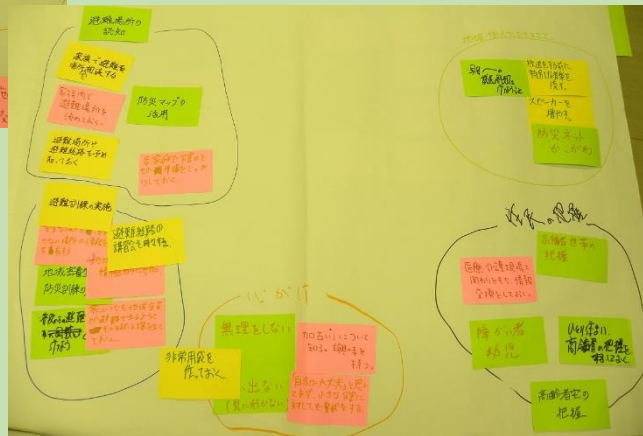
テーマ：交通事故を起こさないためには？

道が狭かったり、ガードレールが設置されていなかったり、街灯がなかったり、信号機が少なかったりと物理的な問題を指摘しつつも、設備を整えることの難しさから、個々人の意識の改革を中心に議論がなされた。自転車のマナーの向上(場合によっては免許制にする)、学生と地域の共同で交通ボランティアを行うなどの意見が出された。

テーマ：災害にどう備えるか？

大きく2つの事柄にまとめられた。1つは地域との関わりの大切さの指摘である。普段からつきあいを密にすることで、緊急時には自然と協力できると思われる。また、地域の人々で用水路掃除などを実施することで、大雨のときなどの二次災害を防ぐことができる。もう1つは情報の共有であり、防災組織を作ったり、看板や回覧板を積極的に活用することが提案された。

Eグループ



【解説】

テーマ：住みやすい街にするには？

意見は大きく3つにまとめられた。1つ目は「まずは各自で気をつける」であり、自転車の運転マナーの向上について多くの提案がなされた。2つ目は「危険な場所を認知する」であり、不安な場所を調べて周知したりマップにすることや、町内の安全パトロールを行うなどが提案された。3つ目は「近隣とのコミュニケーション」であり、挨拶運動、人々の意見やクレームを共有化、様々な人との触れ合いの場の設定などが提案された。

テーマ：災害時の被害を少なくするには？

多様な意見が出された。各家庭で避難場所を決めておくこと、災害用の携行品を準備しておくこと、避難経路の講習会や地域密着の防災訓練を開くこと、高齢者世帯、障がい者や幼児がいる世帯を把握しておくこと、災害時には早めに放送をしたり特別な音楽を流すこと、設置するスピーカーを増やすこと、防災ネットを活用することなどであった。行政が中心となるべきものもあったが、地域の人々が意識をもつことにより達成できるものも多かった。

Fグループ



【解説】

テーマ：あなたの食べるものは安全ですか？

全国で多発する「食」に係る問題について解決策が提案され、3つのレベルに分類された。「国」は自国での生産能力を向上させるように努める必要がある。「生産者」は化学物質を少なくし、アレルギー表示を明確にし、さらには生産者情報を開示することなどが求められる。「個人」は食品への正しい知識をもち、品質表示の確認を怠らないことが大切である。また、何か起こった時の風評被害について、対策を講じることの重要性も論じられた。

テーマ：生活環境は大丈夫ですか？

地域における防災、環境美化、ため池の整備などの意見が多数出された。具体的な対応として、地域や家族で防災に対する意識をもつこと、地域住民の意見の吸い上げや学ぶ機会の確保、回覧板の活用などによる情報の共有が提案された。それらの中心に位置するものが地域コミュニケーションであることが確認された。

Gグループ



【解説】

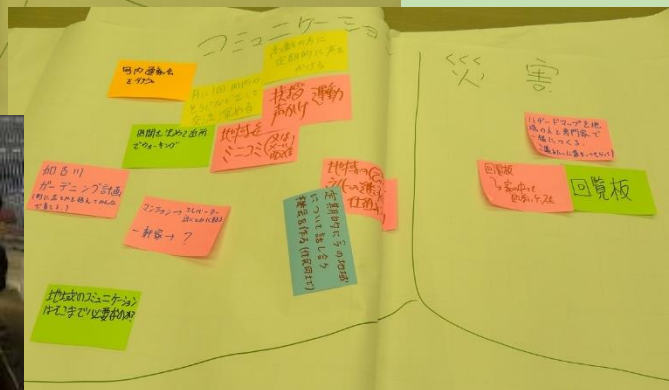
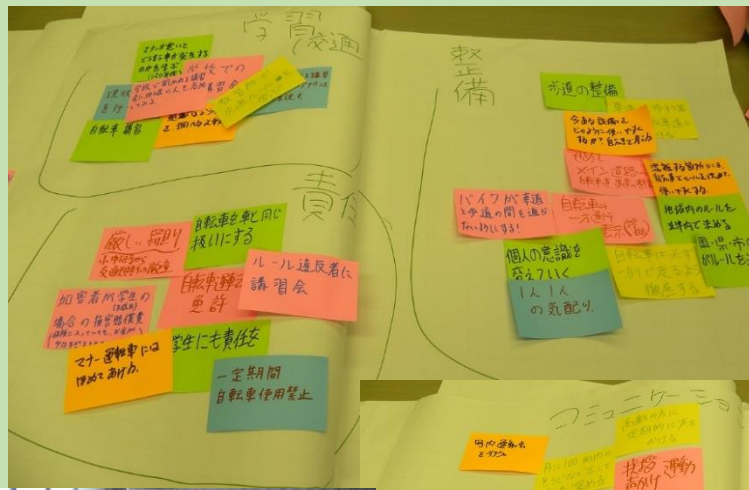
テーマ：治安をよくするためには？

誰が行うかで意見は3つに分類された。あいさつや声かけといった「自分たちができること」、警察の強化や防犯カメラの設置といった「行政・公ができること」、不審者の情報の共有や見回りパトロールといった「地域ができること」となった。特に地域でできることについての意見は多く、他にも「子ども110番」を増やすこと、自転車の盗難を防ぐために預けられる場所を増やすこと、防犯灯が少ないところを点検することなどの意見がみられた。

テーマ：自分の町のインフラは大丈夫ですか。

意見は行政を中心とした整備や対策と、自分たちでできることに分類された。前者は、川の治水対策や、危険な道路の整備に関するものが中心であった。増水時のため池の活用や自転車専用道の設置などが挙げられた。また、後者は、増水時の避難経路の作成や、通学などで子どもを見守る取り組みなどが挙げられた。さらに、自分たちでできることと、行政の力を必要とするものの線引きについて、地域で話し合うことの必要性も論じられた。

Hグループ



【解説】

テーマ：交通ルールを浸透させるには？

個々人の意識の問題として「責任」、危険な現実やルールを理解することとして「学習」、行政を中心とした対策として「整備」が挙げられた。責任では、危険な行為について罰を与えるなどの厳罰化と自転車の免許制などが指摘された。学習では、学校や地域で講習会をしっかりと開催することの必要性などが挙げられた。整備では、車道と歩道をしっかり分けることなどが求められた。

テーマ：例えば地域力とは何か

「コミュニケーション」に分類される意見が多数出された。挨拶や声かけ、定期的に地域について語り合うこと、月に1回程度の町内掃除、町内で運動会を行うことなどが挙げられた。ただ、そこまでの地域コミュニケーションの必要性について疑問も出された。また、「災害」についても意見が出され、ハザードマップを地域と専門家が協働で作成すること、回覧板の活用などが論じられた。なお、回覧板は家庭で見ない人があることも指摘された。

1 グループ



【解説】

テーマ：自己愛を向上させるには？

長所や短所など自分を知ることが大切である一方、知識を増やしたり見分を広げたりすることで視野を広げることが求められた。また、他者とのつながりも重要であり、家族や友人など身近な人と会話をすること、人との協力や助け合いを行うことも挙げられた。これらのことに無関心でいることが、自己愛にとっては最も悪いと結論づけられた。

テーマ：自分の地域を知っていますか。

自ら動き、何かを発見することの大切さが論じられた。散歩、掃除、ゴミ出し、祭りなどに積極的に参加することで、挨拶ができ、コミュニケーションが生まれ、顔と名前が一致ようになる。そうすれば、不審者かどうか分からないといった状態を避けることができる。理想はサザエさんのようなご近所づきあいである。ただし、若い世代は、平日は仕事、土日も忙しく、地域の行事に参加することが困難という問題も指摘された。

Jグループ



【解説】

テーマ：災害時に備えて一人一人が優先的に何をすべきか？

数多くの意見が出された。発生する災害の想定、ハザードマップの作成、家族での情報共有、非常時の携行品の準備、避難場所や避難経路の確認、防災ネットの利用、若い世代による動けない人への支援、防災対策の講演会の開催と参加、自分の命を自分が守る意識をもつことなどが挙げられた。

テーマ：道路環境をよくするには？

危険だと思える箇所を地域単位で挙げ、必要に応じて行政にも働きかけることが求められた。具体的には、歩道・自転車道・自動車の減速を促すバンプ道路を整備すること、防犯灯の増設や修理、中央分離帯・カーブミラー・看板の設置、道路脇を花壇にすることなどの意見が出された。また、スマートフォンを見ながら歩行したり、傘をさしたまま自転車に乗ったりしないなどがよくあり、交通ルールを守ることの必要性についても論じられた。

Kグループ



【解説】

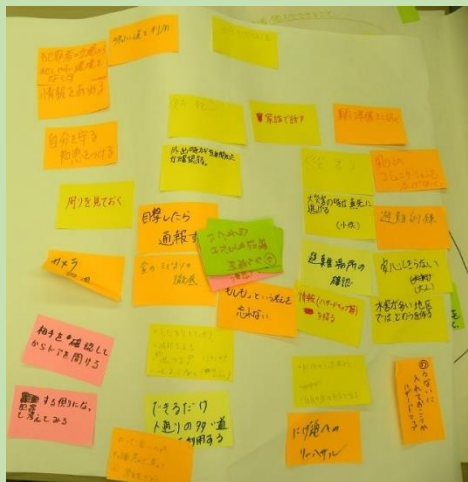
テーマ：地域のコミュニケーションを深めるには？

挨拶の重要性が指摘された。ただし、自然と挨拶ができる環境づくりに取り組むことが大切とされた。自治会の活動、子供会や老人会の活動、清掃活動、防災訓練、大学の学園祭などを活用することが考えられる。それらの行事があることを様々なツールにより周知することも必要である。また、世代を超えた交流を行いお互いが教えあう機会を設けたり、子供たちが安心して遊べる広場を設置したり、ボランティアで観光係をつくることも提案された。

テーマ：安全な道を作るには

多くの意見が出され、それらの内容が順序づけられた。最初に、交通ルールの遵守やゆずりあいなど、個人の意識を高めることが必要である。次に、地域の中で危険な場所や不審者情報を共有して対応を話し合う場を設ける。そして必要に応じて、ミラー・ガードレール・標識・横断歩道などを増設したり、狭い道は一方通行としたりするなど、行政へ提言することが求められる。

Lグループ



【解説】

テーマ：ご近所付き合いしてますか

地域に関心をもつことが大切である。一人ひとりが当事者意識をもち、積極的にかかわることが求められる。自治会の活動や地域の行事にはできるだけ参加するようにすること、年代間の交流を行うことなどが提案された。ただし、少子化で子ども会がなくなってきたことが問題として挙げられた。また、地域の情報を知ることの重要性についても論じられた。

テーマ：加古川って安全なの？

加古川を、より安全にするための方法についての意見が多く出された。明るい道や人通りが多い道を通るようにする、防犯カメラを設置する、戸締りをしっかり確認する、不審者などを目撃したら通報する、事前に家族で安全について話しておくなどが論じられた。また、犯罪者目線で犯罪を行いやすい環境について考えることも大切ではないかという意見も出された。

(2) 議論されたテーマの分類と主な意見

前半の議論で提出されたテーマのうち、実際に後半の議論で解決策が論じられたものは24テーマであった。これらにはテーマの内容が類似したものが多くあり、比較的近いものをまとめて分類し、【表3-3-1】に示すように5つのカテゴリとした。それぞれについて、議論で出された意見を振り返ってみる。カテゴリごとの主な意見を【表3-3-2】に示す。

カテゴリの一つめは「防犯」であり、不審者から身を守る方策、犯罪をなくす方策などについて議論された。自分の身は自分で守る、公助の意識をもつなど、防犯に関する心構えの意見が多く出されている。また、近所同士の声掛け、子どもの登下校への大人の付き添い、地域住民によるパトロールなど、地域の人々が気にかけることで実行できる内容も多い。さらに、防犯カメラの設置、警察の強化など行政の力を必要とする意見も出された。

二つめは「交通」であり、交通事故を防ぐための方策について議論された。まず重要とされたのが、交通ルールを守ることである。近年、スマートフォンの普及にともない、自転車に乗りながらスマートフォンを操作したり、イヤホンで音楽を聴いたりする人が増えている。これらの行為が危険であることは、いずれの議論においても共通した認識であった。それらを遵守させるために、学校や地域で講演会を開く、取り締まりを強化する、免許制にするなどの意見が出された。また、環境面から交通事故を防ぐことを求める意見も挙げられた。車道と歩道を分ける、交差点などのミラーを増やすなどがあった。さらに、地域において危険な道がどこか調べ、その情報を共有することで事故を減らすことができるのではないかといった提案もみられた。

三つめは「災害」であり、地震や洪水のような緊急事態にどのように対処するか議論された。自分の命を自分で守るという意識のもと、日ごろから携行品を準備したり、家族と避難場所を事前に話し合っておくことが大切である。また、近所づきあいをすることで、いざという時の助け合いにつながるという意見も出された。高齢者や体の不自由な人のいる世帯を把握しておくことも大切である。災害において地域はどのような状況になるかを理解するためにハザードマップを作成したり、回覧板などの活用で情報を共有することも求められた。加えて、地域住民が中心となって防災組織をつくることの提案もあった。

四つめは「環境」であり、食やインフラについての問題が議論された。食については消費者自身がチェックする目をもつこと、製造業者が適切な情報を公開すること、行政が自国での生産率を上げる施策を行ったり、風評被害の対策を講じることなどの意見がだされた。インフラについては、地域特性が出ており、加古川やため池の整備や活用を求める声が多かった。

五つめは「自己・地域」であり、自分をよく知り、地域をいかに活性化させるかについて議論された。自分を知るためには、知識を深め、広げることが大切である。そのためには、多くの人と話をすることが一番である。一方で、地域を活性化させるためには、挨拶をはじめとする近所づきあい、運動会などの地域の行事、清掃などのボランティア活動に参加することなどが考えられる。自己を知ることと、地

地域の活性化は決して無関係でなく、強いつながりがあることは想像に難くない。ところで、地域活性化について、世代を超えた交流の場を設定することが挙げられた。地域の伝統を高齢者が若い世代へ伝え、ICT関係など新しい技術を若い世代が高齢者へ伝える。このような取り組みが多く地域で活発になされることは、地域が時を超えて発展していくための礎となるのではないだろうか。また、観光ボランティアの推進といった意見も見られた。加古川地域の活性化を内外から推し進める有効な方策の一つであると思われる。

議論が行われたテーマの分類

1. 防犯
A-1 子供が安全安心に生活するには？
A-2 防犯力を上げるには？
B-1 不審者から身を守るには
C-1 地域で安心して暮らせますか
C-2 犯罪被害を減らすためには？
G-1 治安をよくするためには？
L-2 加古川って安全なの？
2. 交通
B-2 なぜ事故(交通)が多いか？
D-1 交通事故を増やさないためには？
H-1 交通ルールを浸透させるには？
J-2 道路環境をよくするには？
K-2 安全な道を作るには
3. 災害
D-2 災害にどう備えるか？
E-2 災害時の被害を少なくするには？
J-1 災害時に備えて一人一人が優先的に何をすべきか？
4. 環境
F-1 あなたの食べるものは安全ですか？
F-2 生活環境は大丈夫ですか
G-2 自分の町のインフラは大丈夫ですか？
5. 自己・地域
E-1 住みやすい街にするには？
H-2 例えば地域力とは何か
I-1 自己愛を向上させるには？
I-2 自分の地域を知っていますか。

K-1 地域のコミュニケーションを深めるには？

L-1 ご近所付き合いしていますか

表 3-3-1 議論が行われたテーマの分類

分類されたテーマごとの主な意見

防犯	共助の意識をもつ・良心を育む 高齢者や子どものことを優先的に考える 自分の身は自分で守る意識をもつ 戸締りを確認する習慣をしっかりとつ 家族で安全について話しておく 近所の声かけ・挨拶 明るい道や人通りの多い道を通るようにする 子どもの登下校に大人が付き添う 不審者の情報の共有 地域のパトロール コミュニケーションの促進(地域行事など) 暗いところや危険なところをチェック 犯罪者目線で危険な場所を検討 防犯の講習会の開催 子ども 110 番を増やす 防犯カメラの設置 行政と地域の人々との連携を強化 組織の垣根を超えた連携 警察の強化 自転車を預けることができる場所をふやす 明るく美しい街づくり
交通	交通ルールを守る スマートフォンを見ながら、傘をさしながらの自転車の運転をやめる 自転車のマナーの向上(免許制も検討) 交通ルールの順守やゆずりあいなど、個人の意識を高める 事故が起こった場所についての情報共有 学生と地域が共同で交通ボランティア

学校や地域で交通安全の講習を開く

危険な場所を地域ごとに確認

行政への提言

自動車や自転車の取り締まりを強化

車道と歩道を分け、整備をする

減速を促すバンプ道路の設置

中央分離帯の設置

ミラーの設置

道路脇の花壇の設置

狭い道は一方通行にする

地域との連携

渋滞の緩和

街灯を増やす

災害

自分の命は自分で守る意識をもつ

各家庭で避難場所を決めておく

災害時の携行品を準備しておく

普段から近所とのつきあいを密にする

地域での用水路などの掃除

高齢者世帯や障がい者がいる世帯を把握しておく

ハザードマップの作成

看板や回覧板の活用

防災組織をつくる

避難経路の講習会をひらく

防災訓練をひらく

防災用のスピーカーを増やす

環境

各自が食品についての正しい知識をもち、品質表示の確認を怠らない

通学などで子どもを見守る取り組み

増水時の避難経路の作成

業者は食品の化学物質を少なくし、アレルギー表示をきちんとする

自国での食品の生産能力を向上させる

風評被害の対策を行う

ため池の整備や活用

川の治水対策

危険な道路の整備

自己・地域	<p>個人個人が知識を増やしたり見聞を広げる</p> <p>自分の長所や短所を知る</p> <p>自転車マナー向上の取り組み</p> <p>家族、友人などとのつながりをもつ</p> <p>挨拶運動</p> <p>散歩、掃除、ゴミ出し、祭りなどに積極的に参加→コミュニケーションが増える→名前と顔の一致</p> <p>サザエさんのような近所づきあいが理想</p> <p>不安な場所を調べて周知</p> <p>町内の安全パトロール</p> <p>町内の清掃活動</p> <p>町内で運動会</p> <p>ハザードマップを地域の人と専門家で作成</p> <p>回覧板の活用</p> <p>多くの人と触れ合える場所の設定</p> <p>世代を超えた交流の場の設置</p> <p>自治会、子供会、老人会の活動の活発化</p> <p>ボランティアで観光係を設置</p> <p>若い世代が地域の行事に参加できないことが問題</p> <p>子どもたちが安心して遊べる広場の設置</p>
-------	--

表 3-3-2 分類されたテーマごとの主な意見

(3) 議論全体の意義

5つに分類されたカテゴリごとに出された意見を見ていくと、いずれのカテゴリについても、地域住民あるいは個人ができることが非常に多いことに気づく。「防犯」では自分の身を守る意識をもつことから始まり、近所の声掛けや地域住民のパトロールなどがそれにあたる。「交通」では地域や学校で交通安全に関する意識を定着させるような講演会を開くことが求められている。「災害」では日ごろから携行品を準備すること、高齢者や障がい者がいる世帯を把握する必要性が挙げられている。「環境」では食の表示などに意識をもつことや、ため池などの活用を考えることなどがあつた。「自己・地域」では自分をよく知り、地域の行事に積極的に参加することなどが意見として出された。いずれも、自分たちの力で実行可能なものであり、適切なきっかけがあり、歯車がうまく回ることによって持続できそうな取り組みも多い。

自分たちができること、あるいはすべきことについて加古川地域の住民は高い意識をもっていることを確認できた。これは議論全体の意義の一つであろう。

課題は、適切なきっかけと、歯車が回る仕組みである。「自己・地域」で指摘されたように、特に若い世代が参加することが難しい現状がある。そのあたりを念頭に置き、後押しするような環境を、大学や行政がつくることが求められるであろう。

一方、危険を避けるための道路の整備や、自転車の免許制、川の治水対策など、行政の力を必要とする意見も数多く出された。ただし、これらについても、地域住民が単に待ちの姿勢をとるというのではない。「防犯」では地域と行政の連携の強化を求める声が、「交通」では行政への提言の必要性が、そして「自己・地域」ではハザードマップを地域と専門家が一緒に作成する提案が、意見として出された。地域住民が、大きな課題に積極的に参画する用意があることを示したと言えるのではないだろうか。これも議論全体の意義の一つであろう。

(北島律之)

加古川地域「安心・安全 カルタ」

<p>わ たしたち 一人一人が 防犯係</p>	<p>ら くをして 安全な街は つくれない</p>	<p>や っちゃった そうなる前に 確認を</p>	<p>ま てよコラッ! 目の前信号 赤だけど?!</p>	<p>は じめよう きんじよの人と ごあいさつ</p>
<p>り かいしあえる 地域のキズナが 安全につながる</p>	<p>み んな一緒に 絶対守ろう 交通ルール</p>	<p>ひ とと人 つながり守る 地域から</p>	<p>ふ だんから 自分を守るのは 自分だけ</p>	<p>を んりようを 大きくさせよう 放送施設</p>
<p>る ーるをね 守るとみんな 良い気持ち</p>	<p>ゆ だん タイテキ そのスマホ</p>	<p>む かんしん 一番イケナイ 絶対に</p>	<p>へ いお待ち! 狭い道そんなに 急いでどこへ行く?</p>	<p>れ んしゅうだ 皆で作ろう 防災地域</p>
<p>ん !いいね!! 優しい気遣い できるひと</p>	<p>よ くないよ ながらスマホと ルール無視</p>	<p>も う一度 あの人だーれ? ふり返る</p>	<p>ほ っとする 温もりのある街 加古川に!</p>	<p>ろ うじんを 大切に出来る 人づくり</p>

<p>な まえを 近所の人の 知ろう</p>	<p>た のしもう 地域ぐるみで 町づくり</p>	<p>さ いきんは あのおじいちゃん 元気かな？</p>	<p>か なえよう 事故のある場所 安全に</p>	<p>あ そこにも 笑顔の花咲く 街にしたい</p>
<p>に こやかに あいさつしよう 誰とでも</p>	<p>ち やりのつて スマホを見ずに 前を見よう！</p>	<p>し あわせ いっばい かがわのまち</p>	<p>き をつける 最も「悪」は 無関心</p>	<p>い いのかな 行動前に 考えよう</p>
<p>ぬ くもりある ちいきれんけい</p>	<p>つ ながりで 守ろう 地域の安全</p>	<p>す つきやねん やっぱりすきや このまちが</p>	<p>く ふうして 地域で描く 防災マップ</p>	<p>う しろから いろんな危険が 追ってる</p>
<p>ね ずみまでもが おどろくような 防犯対策</p>	<p>て いねいな 運転こそが 思いやり</p>	<p>せ まいなあ そう思うなら 一列で！</p>	<p>け いけんを 大いに活かし 伝えよう！</p>	<p>え んまんな 家庭と地域 あいさつで</p>
<p>の びのびと 子供が遊べる 加古川市</p>	<p>と まれ！！ 一時停止は 大事やで</p>	<p>そ れぞれの 防災意識 高めよう</p>	<p>こ ども達 地域の宝 守りぬこう</p>	<p>お 互いに できることを 考えよう！！</p>

ファシリテーター研修の授業で一人の学生に出会いました。彼を見た最初の印象は、「意識が低い学生」でした。髪型も服装もなんとなくだらしがないし、研修開始ギリギリに到着。椅子に浅く座って、背もたれにもたれた感じです。研修中の私の問いかけにも言葉少なめで、実際のワークショップ体験中も、積極的に自分の意見を言うことはありませんでした。研修には来ているものの、学ぶやる気も、やってみる勇気もないのです。私は、正直不安でした。彼に熟議のファシリテーターが務まるのかと。

しかし、迎えた当日の朝の彼は違いました。驚きました。なんと彼の服装はスーツで髪型もきちんとセットされていました。しかも誰よりも早く到着して、細々と準備している。これまでにない真剣な表情です。私の驚きは熟議がスタートしても更に続きました。話合いでは、どの参加者の意見にも真剣な眼差しで耳を傾けている！しっかりとうなずいている。見事に参加者の声を引き出しています。また、そればかりか、参加者から出た意見を、悩みながらも一生懸命自分なりにまとめようとして、その姿が、熟議参加者の共感を呼び、見事に全員参加の議論になっている。

彼が自分の力を今まで隠していたのか、それとも彼が成長したのかはわかりません。でも、どちらにせよ、彼の力を引き出させたのは熟議という「場」だったのだと思います。本気を引き出させる本番という場です。地域の大人や高校生が集まり、それぞれの意見を真剣に議論する場だからこそ成し得たことなのではないのかなと思います。考えてみれば、力を引き出されたのは彼だけではないように思います。参加した大学生全員が、この熟議という場によって成長したのではないのでしょうか。

「最近の若者は・・・」というセリフはいつの時代の若者も言われてしまいます。でも、大人がそういった言葉を使えば使う程、若者は「本気」を引き出す場からは遠ざけられてしまいます。私たち大人が、若者に役割を任せることは勇気のいることかもしれません。でも任せるからこそ成長するのです。勇気が必要なのは、若者ではなく、私たち大人なのかもしれない。たった一日の熟議でしたが、その日に至るプロセスを含め、そんなことを感じました。

最後に、例の彼ですが、熟議が終わり、参加者が帰ったあと、達成感に満ちた表情で私に「思った程うまくはいきませんでした、楽しかったです」と言ってくれました。その時、私から見た彼の印象は「意識の高い好青年」となっていました。